

富士川游と土肥慶蔵

長門谷 洋治

平成二年一〇月七日(日)、順天堂大学有山記念講堂において『富士川游先生没後五〇年記念会』(宗田一実行委員長)が行われたが、そのさい筆者も『富士川游と土肥慶蔵』なるテーマで講演させていただくことができた。

富士川游先生(以下、富士川)が亡くなられた昭和一五年、筆者は小学校の二年生であった。土肥慶蔵先生(以下、土肥)の死亡された昭和六年当時は、筆者はまだ生まれてもいなかった。

もっとも没後五〇年ということになると、直接当時を知っている人は必ずしも多くはない。しかし富士川の場合は「この人に勝る人はない」という人が現存する。富士川の子息、富士川英郎氏である。今回の五〇年記念会にも元氣な姿を見せて下さり、講演して下さった。さらに氏はその直後に『富士川游』(平成二年一〇月二〇日発行、小澤書店)なる著を上梓された。本書中には当然土肥も登場し、人名索引でも一六ヵ所に及んでいる。ことここに至っては筆者の駄弁を再録していただくことをためらわずにはおられないが、記念会・日本医史学会編集委員会のご好意に甘えいささか述べさせていただきますこととした。

なお文中敬称は省略、年の表示は元号に統一したことをお許しいただきたい。

富士川游（慶応元年生、昭和一五年没（一八六五～一九四〇））が日本の医史学の、土肥慶蔵（慶応二年生、昭和六年没（一八六六～一九三一））が日本の皮膚科学の創始とその基礎づくり、夫々大きな貢献をなしたことについては異論のないところであろう。また呉秀三（慶応元年～昭和七年（一八六五～一九三二））が日本の精神医学に大きな役割を果たしたことも知られているが、富士川はその多彩な人的交流の中で、とくに土肥と呉にとりわけ強い親近感を持っていたと思われ、かつ土肥も呉も富士川の影響を受けたであろうが、ともにともともと医学史に関心があり、その面でも夫々大きな業績をあげていることが注目される。呉については当日、岡田靖雄氏が講演された。富士川と呉とは同郷（広島県）でもあった。土肥は福井県の出身だが、富士川・土肥とも郷里、とくにその地の医学会に力を入れた（富士川は芸備医学会・会誌『芸備医事』、土肥は若越医学会・会誌『若越医事』）ことが注目され当然ながら広島・福井両県では夫々先達として二人の顕彰に力を入れている。今次の記念会でも広島県の江川義雄氏が、富士川につきその面からの講演をされた。

昭和四〇年は富士川の生誕百年に当るため「富士川游先生生誕百年記念会」が結成され、五月一六日、東京大学医学部中央図書館講堂において記念式典をもった。赤松金芳氏の開会の辞のあと、日本医史学会の緒方富雄、日本児童学会の竹内薫兵、正信協会の常光浩然の各氏より式辞が述べられた。

翌昭和四一年は土肥の生誕百年で、日本皮膚科学会が中心になり、五月八日、京都市での日本皮膚科学会総会並びに学術大会で中野操・北村包彦の両氏が記念講演をされ、六月一八日、東京大学における日本皮膚科学会東京地方会で記念式典がもたれ皆見省吾・高橋明両氏の講演があった。この講演で中野・皆見両氏がとりあげられたのがともに土肥の『世界

『毒史』であったことは、この著上梓の意義が如何に大きかったかを物語っているといえ、富士川の『日本医学史』、呉の『シーボルト先生——其生涯及功業——』とともに、本書はわが国医学史上のモニュメントであるといえよう。『世界毒史』（大正一〇年）は三年後にドイツ語版が出されていることも注目される。むろん梅毒は富士川にとっても興味のあるテーマであり、早くも明治三五年の日本皮膚科学会第二回総会で「東亜梅毒の起原に就て」と題して述べており、土肥がこれに示唆を受けたところまた少なくはなかったであろう。

四

富士川は幼名を充人^{みつと}といい、子長と号し、他にもいくつかの筆名・別号を用いたが一般には富士川^{あづま}游で通っている。

ユウは名前でもいろいろな字が用いられるが、游という一字であらわす例は今日でもあまりみかけない。また最近は一プロ利用による印刷が行われるためか、游と記しておいてもできあがってきたものには遊となってしまうこともある。游と遊の字義についてはとくに知るところがないが、游の方は「およぐ」とか「旅行する」の意味が強いようである。土肥に『顰軒游戯』（昭和二年）と題する一書がある。顰軒は土肥の号であるが、なぜ游戯という字を用いたのであろうか。また『乙丑周游記』（昭和六年）でも游の字を用いている。

文字にはうるさい土肥のことゆえ、それなりの意図をもって使用したのであろう。しかし游とはなかなか今風の言葉でもある。ある意味で富士川自身が游の人生であったといえなくもない。

また富士川は静岡県の富士川で遊んだり、泳いだりしたことがなかったであろうか。これぞまさに富士川游である。

五

石原理年氏によれば昭和六二年四月二〇日、広島県高取郵便局より「富士川游先生顕彰碑と同局背後の荒谷山」を意匠



図1 富士川游に関する風景印
 (昭和62年4月20日、広島高取局、石原理年氏提供による)

とした風景印(図1)が発行された。わが国では医師などの人物をテーマにした切手や風景印は少ないので、これは記念すべきものであるといえよう。ちなみにここに印された碑は昭和五〇年八月、富士川誕生の地、広島市安佐南区安古市町大字長楽寺に富士川游顕彰会により建てられたものである。なお土肥については昭和三十一年一月J.R武生駅近くに武生市医師会により設置された「土肥慶蔵先生誕生地」碑がある。

六

呉もそうだが、富士川も土肥も医家の生まれである。土肥は養子になるが、生家の石渡家には適塾に学んだ者もいる。富士川の父・雪ゆきはのちに游が関与した奨進医学会の創始グループの一人である。富士川は明治二〇年に県立の広島医学校を卒業し、同年上京するが、当時呉や土肥はまだ帝国大学医科大学の学生であった(明治二三年卒業)。岡田氏によれば翌二二年末か二二年はやくに富士川と呉とはあいしつたと。そして呉は同二二年一月から三月まで土肥と本郷区西片町で同宿(大学では同級)であったと。土肥は『日本医学史』に寄せた序文で「芳溪願ミテ客ヲ余ニ介ス。余是ニ於テ始メテ富士川子長ト相識ルヲ得タリ」としているのこのころに呉(芳溪と号す)により土肥と富士川はあいしつたことになり、ここに三人のグループが形成された。三人は当時のエリートへの条件の一つであった外国、なかならずドイツを中心とした欧州への留学を行っているが、土肥がもっとも早く明治二六年に出発し、三〇年には呉が、三一年には富士川が欧州に向い、土肥は三一年帰国しているので外国で富士川らに会ってはいないが、富士川と呉とはウィーンやイエーナで会い、そのさいの写真も残されている。

呉を含め三人ともその論文・著書の数は多い。むろん蔵書も多かった。富士川は晩年鎌倉から東京へ列車で通っていたが、その車中でも執筆に余念がなかった由。一方、土肥は推敲を重ねるほうで、自ら編集にあたった『皮膚科及泌尿器科雑誌』の内容にもこまかい目を配った。同誌は明治期のわが国医学雑誌の白眉とされているが、土肥が容易にゴーストを出さないの、印刷を引き受ける朝香屋書店の主人が困ったと伝えられ、その面では土肥は印刷屋泣かせであった。土肥に漢学の素養が大きかったのは彼が故道人総生の門に入って学んだことも大きい要素であるとされる。故道人のところには中村敬宇も文を持ち込んだが、彼はそれにも完膚なきまでに朱を入れたと土肥は記している（土肥顎軒「古道人総生先生を語る」『體性』一七卷六号、昭和六年）。

富士川の著作量がとくに多いのは速筆であった他に三人の中ではもっとも長寿であったことも無視できないであろう。土肥が昭和六年に亡くなり、追悼の辞を寄せた呉も翌年には死亡している。富士川はそれから八年間を生き、しかもその間に生涯の決算ともいえるべき大きな仕事をしている。昭和一三年に結成された杏林温故会（のち日本医史学会関西支部）の発会のさいにもきちっとした祝辞を寄せてくれている。富士川には胆石の持病があったが、死の一カ月前にはまだ旅行の心づもりをしているなど、老いを感じさせないものがあった。死が近づいても重厚な治療は希望せず、現在でいう尊厳死的なものを選んだとされる。彼は宗教的な素養があったので、その面からも達観の境地に達していたのだろうか。死亡後、頭部の解剖が行われ、脳が取り出された。

土肥は昭和三年に直腸癌の根治手術を受け、いったん健康を取り戻すが、同六年肝臓癌で死亡する。死の直前までその著『乙丑周游記』に手を入れ、その題字を記した。

日本皮膚科学会の前身、日本皮膚病学会が発足したのは明治三十三年であるが、当時は皮膚科医がごく僅かであった関係もあり、土肥は知人の幾人かを日本皮膚科学会の会員とした。富士川もその一人であった。また三八年発足の日本花柳病予防会では富士川も土肥とともにその幹事となった。富士川が三五年の日皮会で梅毒の歴史について述べたことは前述したが、三七年の第四回総会では「ブレンクと日本医学」につき述べており、四一年の第八回総会では「東洋癩病史」を講演している。

明治二五年三月四日、私立奨進医会は富士川の首唱により先哲祭を開いた。このとき呉は出席したが土肥は参会予定のところ都合で欠席した。翌年は医家先哲追薦会と改名したがこのときは呉とともに土肥も出席している。

下って昭和二年、日本医史学会創立協議会がもたれるが、ここへも富士川、呉、土肥の三名とも出席、そのあと第一回例会がもたれたが五人の講演者中には上記三名があり、そこへ金杉英五郎、藤浪剛一が加わった。三人はともに日本医史学会の発起人となり、正式に学会の発足をみるに至るが初代理事長には呉が、理事の一人に富士川が、そして評議員の一人に土肥が選ばれた。富士川は昭和一三年に日本医史学会の理事長になり、死亡までその職にあった。

富士川の著述の主要なものは富士川英郎氏により『富士川游著作集』全十卷（昭和五五年～五七年、思文閣出版）にまとめられている。またその伝記も前述のように決定版というべき富士川英郎氏による『富士川游』が出たのはありがたい。ところで游没後一四年後の昭和二九年に『富士川游先生』なる書がその刊行会より刊行されている。この書の第一部「先生の生涯」が実は英郎氏の執筆になったものであって、今回の著はこれを大幅に増補訂正したものであるという。『富

土川游先生』はしかしなお今日においてその価値は高いと思う。とくに赤松金芳氏になるといふ▲先生の言葉▽、すなわち「富士川游語録」はまことに示唆に富んでおりかつ楽しい。今回の記念会で『富士川游先生没後五〇年記念会会誌』とともに、この部分のコピーが参会者に配布されたのは適切な配慮であったといえよう。

一〇

土肥は東大の臨床の教授として多忙な日を送っていたが、さらに医学史の調査・研究にも情熱を燃やしたことは前述のとおりである。その業績の一に奥村良筑〔貞享三年（宝暦十年（一六八六）一七六〇）〕に関するものがある（「奥村良筑考」『顎軒游戯』（昭和二年所収）良筑は彼の郷里、福井県の人である。土肥は明治三十九年、富士川とともに常光寺（現、福井県南条郡南条町上平吹）に良筑の墓を訪うている。いまこの部分を上記の書から抄出すれば以下である。

明治三十九年五月、土肥は富士川・呉の招きで広島県呉での芸備医学会総会に出、江田島海軍兵学校・宮島・広島を経て二人と別れ、吉野・多武峰に寄って一六日に郷里武生に入る。一七日に富士川のみが武生に入り再会。一八日は二人で金沢の北陸医学会総会に出、一泊して武生に帰る。一九日、奥村武氏の案内で上平吹村に向う。寺に着いたとき住職は不在であったが、奥村氏の義兄浅井謙蔵氏が迎えてくれた。奥村家、良筑の墓がどれかが判らなかつたが、やがて奥村氏之墓と刻したる一群の墓をみつけ、その一々について富士川があたっていると「暦」と「庚辰」と読める小さいが苔のもっとも深い墓があり、よくみると「暦」の字の上が「宝」であることがわかつた。これが良筑の墓であると断じて、一同これに礼をし、富士川は拓本をとり、土肥は写真を撮った。このとき住職が帰つて来て、一行を寺房に招いて、過去帳によつて調べてくれた。そのあと一同をも含めて寺の写真も撮った。そのときの写真が『顎軒游戯』に載っているのをそれを転写する（図2）とともに、人物の部分も拡大して示した（図3）。同夜は武生で南條郡の医師と富士川・土肥の兩名との閑談の機会がもたれたが、そこは土肥の実家石渡氏の旧宅で土肥の生まれたところであつた。翌日二人は東京に向つた。

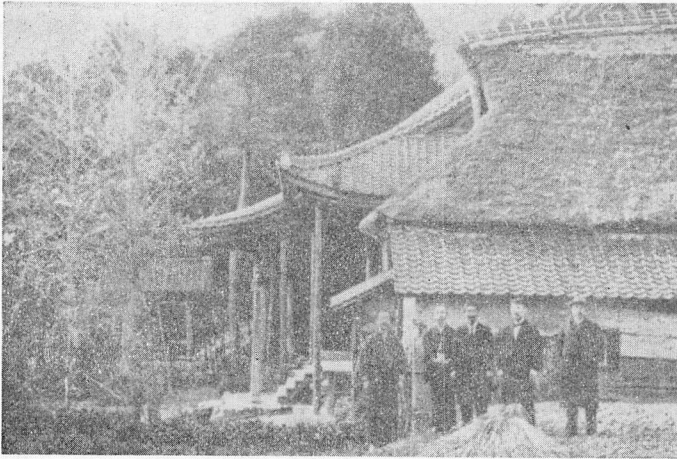


図 2 明治39年5月，土肥が富士川とともに福井県の常光寺を訪れたときの写真。下はその部分拡大図（土肥慶蔵『颯軒游戯』昭和2年より）

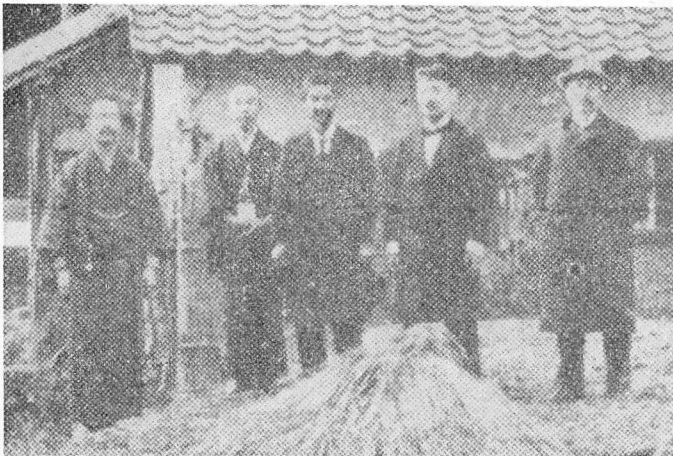


図 3 右より土肥慶蔵，奥村武，富士川游，住職，浅井謙蔵

当時奥村武氏は奥村家に養子に入ったばかりで未だ先祖の墓詣でをしていなかった上、親戚の浅井氏も案内できるほどの者でなかったことが判ったが、とにかく同日良筑の墓が見付かり、祖先のことも幾分判明したのは収穫であったとしてい
る。

一一一

それから一八年後の大正一三年、土肥は再び良筑の墓に詣でた。一〇月五日、奥村良筑・笠原良策・竹内玄同の三先哲の贈位祭が福井県医師会・若越医学会の首唱にて福井市で行われた。県医はこれに土肥とともに富士川を招請したが、富士川は差支えがあり不参となった。そこで県医は土肥を介して呉の来福を求めたところ諾となった。土肥はやはり福井県出身の竹内松次郎を伴って帰県、上記式典に参列した翌六日に三人で奥村の墓へ向った。先代の任職はすでに亡く、若い任職に変わっていたが、過去帳の再覧を申し出たところ、現存すべてと出された過去帳に何故か先年見た項を見出すことはできなかった。さらにこのようなところまで環境の変化があったことを土肥はつぎのように記している。

「細徑に沿ふて他の墳墓の間に交はれる西奥村氏の墓石四基のうち、二番目の最も小さなのに、前年富士川博士と共に探し当てた一円居士之墓を再び見出した。しかし此の物寂かなる山中にも改造の斧はいっしか揮はれ藪茂として昼尚ほ暗かりし周囲の杉檜は今は無残にも悉く伐り拂はれて、明るく古墳は露出した。もはや緑苔を掃ふ労はいらぬが、而も墓前に佇んで古を懐ふ情緒の幾分か殺がれざるを得ないのを遺憾とする」

同日午後は前日の福井市に続いて武生で南條郡医師会による奥村良筑の贈位奉告祭が行われたので、土肥はそこに玉串を捧げたのち、良筑についての講演を行った。

かく、奥村良筑の墓には土肥が二度、富士川と呉が一度、つづ詣でたことになる。

奥村良筑の墓には富士川と土肥は同道したのだが、ある墓を二人が別々に訪ねた記録がある。それは良筑の弟子にあたる永富独嘯庵〔享保一七年〜明和三年（一七三二〜一七六六）〕の墓を大阪の蔵鷺庵に訪ねたことである。ことに富士川は終生独嘯庵に関心を寄せ、死亡の年昭和一五年に『訳解・漫遊雜記』を著しているが、彼が大阪市の蔵鷺庵に独嘯庵の墓を訪ねたのは、明治二五年のことであった。富士川はそのときのことについて後年つぎのように記している。

「独嘯庵は名高い人であつて、我邦の医史上に逸すべからざる者であります。浪花名家墓所記には載っていない。天王寺に蔵鷺庵と云ふ小さな寺があつて、それに墓があるといふので、私は今から二十四五年前、その寺に行つて見ました。するとそんな墓はないと云ふ。残念でありましたから、いろいろその辺を尋ねて居りますと、墓地に隣合つた畑の中に一つの墓石があるので、行つて見るとそれが独嘯庵の碑で、亀井鑑の誌銘、篠崎応道が書いた立派なものである。それで住職に相談をして寺の代々の墓の処に移しました」（『浪花名医の著述』大正三年発表のものを『科学隨筆・医史叢談』昭和一七年に再録）。

一一三

土肥が蔵鷺庵を訪ねたのは富士川のそれより三三年後の大正一四年のことであつた。富士川は独嘯庵の墓を庵内で探したが、土肥は庵そのものを探してゐるのに苦労した。彼はそのときのことを『奇傑独嘯庵』（『顎軒遊戲』所収）に記している。

大正一四年四月、大阪の中之島公会堂で、大阪医科大学教授桜根孝之進博士（皮膚花柳病学）在職満二五年祝賀会があり、その夕、門下生より成る桜蔭会が教授夫妻を静観樓に招請、その席に土肥夫妻も列した。そのさい桜根門下の億川撰

三氏に会った。億川氏は先年緒方洪庵の門人帳のことで世話になったこともある旧知であり、独嘯庵の墓について問うたところ、その墓を見たことはあるが寺のはっきりした位置は記憶していないとのことであった。ホテルでも蔵鷺庵を調べさせたが分らぬとのことだった。翌日、桜根門下の谷村忠保氏が同行してくれることになったが、寺町付近で尋ねたところではたれも蔵鷺庵を知らなかった。と、谷村氏はある寺に入ったが間もなく出てきて運転手に耳打ちした。自動車はもと来た道を戻り、細いところに入って止った。やや行くと瀟洒な衛門が見え石標で蔵鷺庵であることが読めた。谷村氏が玄関で案内を乞う間も待てず、墓地に入った土肥は、最も奥まったところに「處士独嘯庵墓」のあるをみつけた。

富士川によりいったん安置された独嘯庵の墓は、戦後再び無縁墓の中へ追いやられた。これを知った医家先哲の墓を護る会（代表 寺師陸宗氏）は日本医史学会関西支部（支部長 中野操氏）日本師友協会（会長 安岡正篤氏）の協賛と寺側の理解を得て、墓碑を建て直し、昭和四〇年三月に墓前法要と記念講演会を行った。筆者もこの会には出席した。

一四

土肥の書く字は素晴しかったが、富士川の字もまた味わい深いものがある。小川鼎三氏は富士川英郎氏の字と父の游の字体はよく似ているとおっしゃっていた。英郎氏は研究の面でも父君と共通のところがあり、今回の記念会の翌日の朝日新聞で同氏がその著『菅茶山』（福武書店）で第一七回大佛次郎賞を受けられたことを知ったが、菅茶山については游も言及している。丹念な史料調査そのものが親譲りであり、ともに名文家といえよう。

富士川は今でいうグルメでもあったらしい。

大学の講義、史料の探索などで各地を旅行したが、各々の地での味を楽しんだようで、たとえば京都ならどこそことなかなかの舌をもっていた。しかし酒は嗜まなかったという。

わが国医学がその範を西洋に仰ぐとしたことで、旧来の医学は疎んじられ、当時それらの医学書が顧りみられることは

少なかった。富士川はこれを積極的に、系統的に集めた。その蓄積が『日本医学史』（明治三七年）などに実ったが、それらの蔵書は△富士川文庫▽として京大に保管されているほか、慶応大学にもあると聞く。

土肥もまた蔵書家であった。専攻の皮膚科学ではその師カポジ Moriz Kaposi (1837~1902) の蔵書を譲り受けたが、この中には世界的な稀観本をも含んでおり、現在△顎軒文庫▽として、彼自身による集書と合せ東京医科歯科大学図書館内に保管されている。東大にも彼の文庫があり、また漢詩に関するコレクションは国会図書館におかれている由である。

一五

太田正雄（木下杢太郎）はその師、土肥について「先生の御功績は啻に医学の一分科を輸入し、之を大成したまうたと云ふには止らない。亦実に人道上の大宗匠でいらせられた」とし、「古昔は東洋と西洋とを問はず、優れたる医家は同時に博物学者であり、また思想家、人道家であった。而して先生は最も近代的の意味でこの諸質を具備したまうた」と述べている。

筆者が論及する能力はないが、富士川は専門の医史学の他に、もしくは医史学に関連して医の倫理（医道の昂揚）、仏教を中心とした宗教に強い関心を示したほか、児童問題・教育・看護・保険・犯罪・迷信・性問題など幅広い分野に発言し、著述をのこした。驚嘆の他ない。富士川には一般にいわれるような師や弟子はいなかったとされる。しかしその人格に傾倒して近付いた人は多い。赤松金芳氏夫妻はその代表的なケースであろう。

一六

富士川は明治四五年に帝国学士院恩賜賞を受賞している。この賞ができて二回目での快挙である。そして大正三年には文学博士、翌四年には医学博士の二つの学位を得た。学者として最高の評価と最大の栄誉で飾られ頂点をきわめたといえ

よう。

土肥は医学博士であり、昭和二年には帝国学士院の東宮御成婚賞を授与されている。土肥と呉には共通することであるが、富士川と土肥との差は前者が官立大学、なかんづく東京大学の教授に就かなかったことである。その意味で富士川は終生在野の人であった。求めてなれるものでもないが、彼は地位や名譽にはこだわらず、マイペースの生活、游の生涯を送ったといえる。アカデミーに執着しなかったからこそあれだけ幅広いものに関心をもち、活躍ができたともいえよう。反面、野に在る者はえてして視野が狭く、独善的になり、殻にとじこもりがちであるが、富士川にこのような傾向があったとは思えない。これは生来の彼の性格であらうが、土肥や呉と早くから交誼をもっていたことから却って恬淡としていられたともいえよう。

ところでこれはむしろ富士川の責任ではないが、厳肅な事実として、富士川没後五〇年の今日において、なおわが国の官立大学に、ひとりの医史学の教授さえ存在しない。日本医学会の第一分科会という晴れがましい位置を占め、長い歴史と伝統をもつ日本医史学会としては、わが国医学部・医科大学に完全な形で医史学講座が開設されるように渾身の努力をしなければならぬであらう。地下の富士川もそのことを願っているに違いない。

(大阪府豊中市)

Fujikawa Yū and Dohi Keizo

by Yoji NAGATOYA

Fujikawa Yū (1865~1940) laid the foundations of the history of medicine in Japan and Dohi Keizo (1866~1931) performed a similar service to dermatology. The two became acquainted with each other

through the introduction of Kure Shūzō (1865~1932, psychiatrist).

Besides dermatology, which was his regular profession, or rather, in relation to it, Dohi was interested in medical history, and wrote *A History of Syphilis in the World* (1921), his most important work. Fujikawa had also developed an early interest in the history of syphilis.

Dohi also carried on an investigation into the work of Ryoichiku Okumura (1686~1760), a noted doctor in Fukui Prefecture where Dohi himself was born, and Fujikawa cooperated with him in this research. Fujikawa found the gravestone of Dokushoan Nagatomi (1732~1766), a disciple of Ryoichiku, at Zoroan in Osaka in 1892, and 33 years later Dohi visited Zoroan and recorded the fact.

What differs most between the two is that Dohi, a professor at Tokyo University, was at the top of the academic world while Fujikawa remained on the outside all his life.